

1 月例会報告

【日時・会場】2002年1月29日(火) 19:00～筑波大学附属高校会議室→～1:30 カリンカ

【参加者(会員)】荒井義行(毎日新聞) 川前真一((株)バンフスポーツ/横浜ベイフットサルクラブ)
笹原勉(日揮) 澤井和彦(東京大学大学院教育学研究科) 内藤隆(横河FC) 中塚義実(筑波大学
附属高校) 本多克己((株)クラブハウス) 松岡耕自(立命館大学国際関係研究科) 宮崎雄司((有)
オフィスアステカ代表/サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】麻生征宏(学研/筑波大学附属高校非常勤講師) 小出正三(Project2002) 座間
健司(東海大学学生) 中西敦(一橋大学早川ゼミ/LOVE JAPAN)

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでも
コミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものでは
ありません。

2002年(以降)のサロン2002を考える

<目次>

1. テーマ設定の主旨ーサロン2002のあり方を考える意義
2. 会計・名簿担当より
3. サロン2002HPの成果と課題
4. プロジェクトの現状ー既存の3つのプロジェクトについて
5. ワールドカップ・プロジェクト2について
6. その他

<感想・意見(中塚義実)>

まず、サロン2002の歴史を簡単に振り返りながら、テーマ設定に至る経緯について確認した。そして、
事前にいただいたいいくつかの意見を参考にしながらフリーで意見交換した。「ホームページのあり方」や
「プロジェクトのあり方」の議論が中心だったが、「サロン2002の求心力」「会員の当事者意識」等が指
摘され、組織のあり方や個々の会員の自覚を促す機会となった。「ワールドカップ・プロジェクト2」の提
案も為された。

本報告は、当日の資料と参加者の発言(一部カリンカでの議論も含む)をもとにテーマごとに再構成し、
参加者のチェックを経て公表するものである。ディスカッション部分では、代表者である中塚の発言を
「○」で表示、その他は「●」。小見出しは「★」とした。

1. テーマ設定の主旨ーサロン2002のあり方を考える意義(中塚義実)

日本サッカー協会科学研究委員会(当時)の研究グループであった「社・心グループ」を前身とする「サ
ロン2002」は、節目ごとに、自らの組織のあり方や方向性について時間を取って議論してきた。その時々

の課題を解決するためであったが、同時に、この議論は「参加することに意義がある」もであった。組織化が進めば馴れ合いが始まるのはよくあることだが、節目ごとにこの議論を行うことで、「サロン 2002 の当事者」であることを各自が自覚する機会としていた。

今回も、現時点での課題解決(ワールドカップにどう臨むか/2002年度のサロンの組織をどうするか等)が主目的であったが、同時に、議論に参加することで自らのあり方を問い直す意味もある。

まずは簡単に、サロン 2002 の歴史を、いくつかの転機とそのときの議論を中心に振り返りたい。

1. 「社・心グループ」から「サロン 2002」へ (1997～)

研究者による勉強会「社・心グループ」に、様々な分野の方が参加するようになった。研究者集団から多様な人材のネットワークへと脱皮し、組織名も「サロン 2002」として、筑波大学附属高校をホーム会場とした

2. 運営経費としての月例会費徴収 (1999～)

1999.1.29 の月例会では、「サロン 2002 のこれまでとこれから」と題して議論した。このとき、「サロン 2002 の現状」として以下の点を挙げた。

1) 口コミによる"会員"募集。「来る者拒まず、去る者追わず (時には追う)」

→会員数は増えつづけ、会員の質も多様化する

2) 会費を徴収していない

→財源がないため建設的な活動ができない

→いつでもやめることができる=責任なき"ボランティア"活動

3) そのくせなかなか活発に活動している

また、「サロン 2002 の将来—中塚案」として「1) サッカー/スポーツ界の情報交換・人的交流の場、2) サッカー/スポーツ界のシンクタンク、3) 実践する集団」とし、「まずは任意団体としてできることをする→2002年までにNPO法人化」という提案をした。

このときの議論を経て、「月例会で参加費 1000 円を徴収する」ことが決まった。会員制の組織化については見送られた。

3. 会員制組織としての再スタート (2000～)

2000年1～3月にかけて、組織としてのサロン 2002 について集中的に話し合った。それは、「サロン

2002 とは何か」から始まる本質的な議論であった。そして「サロン 2002 設立宣言」が制定され、年度単位の会員制組織となった。「規約」は、この時点で考えられた必要最低限のものであり、組織の展開とともに随時見直していく性格のものであった。

現在の「サロン 2002」は、この時定められた「サロン 2002 : ver2000～2001」に基づいた組織である。つまり、「"志"に賛同した個人であれば誰でも、一定の手続きを経て"会員"となること」ができるが、「会員は"Take"を求めるだけでなく、社会に対して、またサロン 2002 に対して何が"Give"できるかを常に考え、"Give and Take"の姿勢で入会」することが前提である。しかしながら同時に、サロン 2002 では「短期的な成果は求めません。長い目で見た"Give and Take"の関係が成り立っていれば良いのです。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形で"Give"を考えている方(学生含む)なら"会員"となることができます」と謳っている（いずれも 2000.4.2 付文書より）。

また、月例会は「情報交換の場」「人との出会いの場」と位置付けられた。月例会開催案内は、会員に「サロン 2002 通信」の形で届けられるが、月例会への参加は、会員の紹介があれば誰でも OK である。「月例会は基本的に、結論を求める場ではありません。さらに検討を進めて何らかの結論を出したい方は、プロジェクトチームをつくって取り組んでください」（2000.4.2）ということで、「シュートを打ちたい（何らかの働きかけをしたい）」者はプロジェクトチームを作って活動できることとした。会員のメリットは、2000.4.2.の時点では以下が挙げられていたが、「プロジェクトの発起人になることができる」ことも大きなメリットである。

- 1) 月例会案内「サロン 2002 通信」が E-mail で届く。メールのない方へは FAX で送信される
- 2) 会員名簿が届けられる(郵送)
- 3) 希望すれば、公式メーリングリストに参加できる
- 4) その他

大切なことは、サロン 2002 の会員は、「志」に賛同した者の中で、サロン 2002 と"Give and Take"の関係を持つようとする者であるということである。自分には何ができるかを考え、実践してもらおう人でなければならないということである。

4. そして今（2002～）

大きな節目である 2002 年を迎えて、再度、組織としてのサロン 2002 のあり方を議論したい。「ワールドカップの成功」を目指しながら、「ゆたかなくらしづくり」を視野に入れて、組織としてのサロン 2002、及びその構成員としての会員の姿勢を問い直したい。

2. 会計・名簿担当より（川井寿裕－資料のみ）

1. 現状

平成 13 年度においては、名簿を会員としての「特典」として位置づけるため、会費納入確認後、名簿送

付という方式をとっている。具体的な作業の流れは以下のとおりである。

1) 更新期（年度当初）

(1) 会員（入会意思表示）→ (2) 代表→ (3) 会計・名簿担当

<会計・名簿担当の仕事>

<1>名簿原稿の作成（データの加工）

<2>印刷製本の発注

<3>会費納入の確認（送付リストの作成）

<4>発送準備（宛名ラベル作成 封筒作成 名簿封筒詰め）

<5>発送

2) 通常期（年度途中の入会）

(1) 会員（入会意思表示）→ (2) 代表→ (3) 会計・名簿担当

<会計・名簿担当の仕事>

<1>名簿原稿の追加

<2>会費納入の確認（送付リストへの追加）

<3>発送準備（宛名ラベル作成 封筒作成 名簿封筒詰め）

<4>発送

2. 改善点

会計処理と名簿処理については、それぞれ個別に処理した方が負担軽減につながると思われるが、上記のような作業工程を考慮すると、分担して作業するよりも一体として処理を行った方が効率的に作業が行える（ような気がする）。

通常期においては、新規会員の加入数も少数のため事務作業は増大しないが、更新期においては、百数十人のデータ更新から名簿の発送まで限られた時間と期間に行うことから、個人的な負担が増大する。

サロン 2002 の会員は、基本的に皆本業を持っていることなどを考慮すると、個人負担の増大は望ましくない（個人の能力差はあると思うが……）。したがって、更新期に限って、作業を分担するなどの改善策も視野に入れ、より効率的な方法を模索する必要がある。

ただし、作業を分担するとなると連携と協力が重要となり、ある担当の作業が遅れると全体が遅れることになりかねないことや、各担当それぞれのスケジュールがあるので個人の要領のみで作業ができないなどの点は考慮すべきか。

1) 改善策 1 – 加入申込み用紙（フォーマット）の統一

更新期における作業の中で最も時間を有するのは、名簿の原稿づくりである。

転送されてくるデータは、メールでのベタ打ち状態で送られてくるので、このデータを一般のワープロソフトに変換し体裁を整える必要がある。

外注すればよいが、財政的な負担を考えると困難である。そこで加入申込みのフォーマットを統一することにより、送られてきたデータを編集することなくそのまま原稿にできれば、かなりの効率化が図られ、負担も軽減できるのではないだろうか。

2) 改善策2－会費納入方法の徹底－

会費納入に際しては、サロン 2002 の口座に振り込んでいただく方法をとっており、振込済みか否かの確認は通帳記帳により行うこととなる。個人口座からの引落方法でない限り、この方法が唯一確認できる方法である。

通帳には、もちろん振り込む側が入力した情報がそのまま記帳されることになるので、例えば、入会の意志表示の名前と違った名前（ペンネームなど）で振り込まれたり、会社名で振り込まれたりすると、当然のことながら会費納入の確認作業が混乱し、時間的なロスを招くことになる。

したがって、振り込む側が一人ずつ入会の意思表示のデータと同じ名前で振り込むことを徹底していただければ、これもかなりの効率化が図られるとともに負担も軽減される。

3) その他－会計年度の考え方－

会計年度の考え方については、サロン 2002 の事業内容を考慮し決定する必要がある。例えば、9月から翌年の8月までに事業が集中するようであれば、会計年度もその時期に合わせた方がよいと思われる。現段階では、サロン 2002 の定例的な事業は多岐にわたっているものの、一応4月から翌年の3月と解すれば整理しやすいのではないか。

いずれにしろ、会員募集関係業務のみで会計年度を変更することについては少々安易のような気もする。

しかし、任意の団体なので、試験的に色々と試してみるということも考えられる（はっきりしない意見ですみません）。

4) その他－会費納入の遅延－

12年度総会でも意見として提示しているが、今年度も会費未納者の取り扱いに苦慮している。12年度は、メールや電話で数回催促するものの、結局、当該年度の会費を翌年度に納入されるケースが何件があった。また、督促する場合においても、不愉快な態度を示されるケースもあり、会計担当としてもかなり嫌な思いをした。

今年度も現在 22 名の会費未納者が存在するが、メールでの督促は印象が薄いこともあり、解決されて

いないことから、1月中を目途に文書又ははがきにて督促状として郵送する予定である。

必ずしもこの方法が解決につながるものとは思っていないが、会計担当としては何もしないわけにもいかないので、とりあえずの方策と考えている。

いずれにしても、会員としての認識のレベル向上が必要であり、それが事務量の低下にもつながる（逆に会費納入遅延が事務量の増を招いている）という認識を持っていただきたい。

<ディスカッション>

○事務作業の問題は、ひとえに会員の自覚の問題に尽きる。会費未納者がいるから会計担当がいらぬところまで配慮せねばならなくなる。会費を支払うことは"資格要件"であり、サロンに対する"give"以前の問題。会員の自覚を促したい（1.29.時点で22名が未納）

●会費未納者はどういう団体でもいる。どこかで線引きするしかない。以前関わっていた「日本サッカー狂会」は最大270人いたが、退会する人は会費未納で自然退会というパターンが大半。続く人は何があっても続く。どこかで線引きしないと1年、2年とずるずるいってしまう。

○サロン2002は"年度単位"の会員制なので、会費未納の場合は年度で区切って線引きできる。しかし、未納のままサービスを受けている（「サロン2002通信」は未納者にも送信している）ことは不公平。今年度の総会の際、「未納者には一切サービスする必要はない」との意見が強かったし、それが正論なのはわかるが、「うっかりミス」もある。名簿の送付については保留とし、通信は送っているのが現状。年度末に会費の取り立てをせねばならない。その労力が無駄だし、会計担当のストレスになる

●銀行に行くだけなのになぜできないのか。自覚の問題というしかない

3. サロン2002HPの成果と課題（本多克己）

2000年12月25日に立ち上がったサロン2002のホームページの管理運営は、「FCJAPAN」でやっている。ここでは簡単に現状を報告し、今後について議論したい。

1. 成果

- ・毎月の月例会報告のアップ
 - 会員以外の人に活動内容を紹介しやすい
 - 会員にとっても、今までの月例会を振り返りやすい

2. 課題

- ・主に月例会の報告のみで、会員、非会員含め、交流、意見の交換などがない
 - 掲示板の設置 → 会員制にした方が良いか／非会員は読むことはできるが書き込めない(?)
 - 非会員からの問い合わせ先の設置
- ・文字情報のみとなっており、WEBの特性が活かされていない
 - 必要なものについて、写真や図を入れる
- ・原稿をもらってからアップまで、タイムラグが発生してしまう
 - PDFファイルでのアップとすることで、アップまでの時間を短縮できる

3. トラフィック 2001.2～2002.1（立ち上げは2000年12月25日）

ビジット数（何人来たか）…最初の頃は1日10人程度だったが、今は1日平均60人ほど来ている この数字をどう読むか。告知して人を呼ぶことはできるだろうが、するべきかどうか。

<ディスカッション>

○掲示板はほしい。書き込めるのは会員だけというのがいいように思う。

●サロンのメーリングリストの状況を見ると、掲示板が置かれてもあまり書き込まれないのではないかという懸念もある

4. プロジェクトの現状—既存の3つのプロジェクトについて

1. フットサルプロジェクト1

東京都フットサル連盟を組織するにあたって、フットサルの発展を現場で担う人が大勢いるサロンでプロジェクトを組織した。最初のプロジェクトなので、立ち上げの手順も明確にした（2000.10.2.付「フットサルプロジェクト1立ち上げ宣言」。月例会では配布せず）。ここに「プロジェクトの考え方」や「立ち上げ方」が示されている。

2. フットサルプロジェクト2

代表・澤井和彦、事務局長・川前真一で「フットサルの現状把握のための調査をやろう」ということで始まったが、「時間的余裕がない」ため、現在は「ゆるやかに進んでいる」状態。「年度内は厳しいので、体勢を立て直して2002年度の初頭から始動したい」。

3. ワールドカップ・プロジェクトについて

「ワールドカップ・プロジェクト1」は、「このままではいけない。運営やボランティア、市民団体の現状をオープンにして、関係する自治体や団体に知らしめねばならない」という動機から生まれた。課題が明確だったので、短期間で報告書作成・配布まで完了することができた。副産物として、いろんな人・組織とのネットワークが生まれた。

<ディスカッション>

★フットサルプロジェクト2に関して

○プロジェクトは「何を」するかが明確でなければならない。「いつまでに」と、期間を区切ることも必要。そして「誰が」するのか。仲間を集めて、そのときに力を注げる人がぐいぐい引っ張っていかないと進まない。プロジェクト2ではメンバーの募集ができていないことが停滞の一因ではないか。サロンの良さを活かさきれていない

●プロジェクト2は「調査しよう」ということで始まったが、アイデアは出るが足が動かない。実際やるとなれば調査票を作り、データを取ってまとめる作業が必要。是非やりたいという人がそろったところでやるしかない。「調査をしたい方」という形で募集すればいいかもしれない

●学生ボランティアなど、ただで動ける人を集める考え方と、プロジェクト単位で資金を集める考え方がある

○ワールドカップ・プロジェクト1では、賛助金を募る形で資金集めをした（資料参照）

●再スタートの手順として、「フットサルの現状を把握するための調査をするので、興味があって一緒にやってみたいという人を募集」することが必要か。同時に、「どういう調査をしてほしいか」という部分を、フットサルに関わっているサロン会員に呼びかけて、それらをあわせてプロジェクト2としたい

○大事なことは、調査をすることではなく、それをどう使うかである。論文を書いて研究紀要に載せましたというのは研究者の領域でやれば良い。サロンのプロジェクトでやるからには、アウトプットの活用法、社会に対していかにコミットしていくかという視点が必要。フットサル・プロジェクト1は、連盟設立に関わる人に対する啓蒙でありアピールだった。ワールドカップ・プロジェクト1も、ワールドカップの運営に関わる人にしっかり認識してもらおうということであった。そこをはっきりしないと、「何でサロンでそれをやるのか」が見えてこない

★プロジェクトのあり方

○個々の会員が持っている問題意識を個人で解決できるのならそれでいい。だけどせっかく良いネットワークがあるのだから、それを生かせばもっといい解決策が見出せると思ったとき、プロジェクトの言い出しっぺになって、人を集めてテーマを設定してやればいい。サロンじゃないところでできるのであればそれでいい。単なる「研究」なら、サロンよりも学会で仲間を募集した方がいいだろう。ワールドカップ・プロジェクト1は、ワールドカップにいろんな形で関わっている人がサロンにいるからプロジェク

トを立ち上げた。フットサル・プロジェクト1も同様で、それが自然。

●ユース育成や登録問題、クラブ育成など、いくつかのプロジェクトを協会がやっている。2002年は日本に何を残したかに引っ掛けて、日本のスポーツ組織のあり方をどう考えるかをやっておくことは必要。2002年にできることと、その先に何を残すかを分けて考えた方が良い

○ユースリーグ立ち上げの話を、東京都高体連内で「プロジェクト」をつくってやっているが、サロンのプロジェクトでやりたいというのもある。サロンのHP上で情報開示できるし、いろんな分野の方の意見を反映できる。その反面、高体連の先生方に理解してもらうのに労力がある。サロンのプロジェクトとする必然性があるのかどうか微妙

★サロン 2002 の活性化とプロジェクト

●以前は月例会参加者がもっと多かったし、「プロジェクトをやろう」という雰囲気があった。しかし月例会参加者が減り、メーリングリストへの投稿もほとんどなく、今回のテーマに関しても、あらかじめ意見を述べたのは、140人あまりの会員の中でごく数人。これらを考え合わせて、サロン2002の求心力の低下を危惧している。プロジェクトを立ち上げて協力者が現れず、先輩・後輩の関係などで無理やり引きずり込まれるようなことになるのが心配。

○2年前に月例会とプロジェクトを整理したときは、「このままではいけない。何とかしよう」という空気に満ちていた。今もおそらく「何とかせなアカン」と思っている人が多いことは確かだろうが、それぞれが「出口を見出し」てそれぞれで完結している（サロン以外の場所で発言・行動できる）のだろうか。「馴れっこ」になってきたのかもしれない。

●プロジェクトは「このままじゃいかんぞ！」と思った人が「自分たちで動く」ことから始まる。「プロジェクトをしなければ」というのは逆である

●「プロジェクトをどう活性化させるか」という議論自体が本来はおかしい。「お前やれ」というのでなく、いろんなプロジェクトが自然発生的に起こってくる環境作りをする議論は必要。HP上でテーマやメンバーを募集するなど、HPの活用も考えられる。

●「やりたいことがあって始める」のがプロジェクトだが、ワールドカップ・プロジェクト1のように、プロジェクトにはサロンの一つの顔としての意義がある。プロジェクトの存在そのものが組織の求心力となり、再活性化させる。「お祭りのプロジェクト」も必要ではないか

5. ワールドカップ・プロジェクト2について

小出正三氏から、「自分の身近にいる人たちから頼まれてきた」との前置きで、「各地でどのような団体が何をやろうとしているのか。これらをリサーチして、サロン2002がつなぎ手となることを是非やっても

らいたい」との提案があった。「サロン 2002 に聞けば誰がどこで何をやっているか、そこでどんな課題があつてどう乗り越えたのかがわかる」というように、サロン 2002 が情報の窓口になるということである。「現場でやっている人たちは、そういう情報がなくて困っている。現場からのニーズがある」。同様の提案は梅本嗣氏からもあった。梅本氏からの配付資料を一部引用する。

1. 2002年FIFAワールドカップの"成功"に関して

1-1) "成功"をどのように捉えるか → 大会開催におけるホスピタリティの発揮

1-2) 組織としてのサロン 2002 は"成功"にどのような形で貢献しているか。これからどのような貢献が可能か → 様々な団体、アクティビティの「情報交流・ナレッジ共有の場」の役割を「サロン 2002」が果たしうる

関連課題) 関連するサロンや他団体との連携

関連課題) プロジェクトの評価…本年度の「ワールドカップ・プロジェクト1」は、期間内に報告書をまとめ、それなりの成果は残したがあとが続かない。

◎提案概要◎

1-1) →大会開催におけるホスピタリティの発揮

1-2) →様々な団体、アクティビティの「情報交流・ナレッジ共有の場」の役割を「サロン 2002」が果たしうる

<背景>

・昨夏の「コンフェデ杯総括シンポジウム」は、一定の意義をサロン 2002 的にも、また対外的にも持った企画だった。

・管理区域内を中心とする JAWOC 公式ボランティア、開催自治体（ベニュー）における管理区域外の公的ボランティア活動については、その内容・評価には言及しない上で、その他の自発型のボランティア活動を提唱、計画、実施している団体が全国各地にあり、そのプラットフォーム、情報流通が整備されていない

・「サロン 2002」は中立的な任意団体であり、多様な立場、視点、情報・知識を有したゆるやかな集合体という特徴

【基本指針（案）】

「サロン 2002」内で「ワールドカップ・プロジェクト2」（仮称）を設置し、2001 年度成果を踏まえて、全国の自発型ボランティア活動主体間の情報連携、活動基盤整備へのプラットフォーム活動とゆるやかなネットワーク（団体化）を推進する。

→ポスト・ワールドカップ段階を見据えた、日本のサッカー文化、地域文化づくりの主体者のネットワ

ーキング基盤を作っておくことに意義

(以下略)

<ディスカッション>

●例えばJ S A（日本サポーター協会）は、自分のところでやっているのだから、J S A自身から出て行かない情報もある。「J S Aさんは今こういうことやっているよ」という情報を出してあげることが必要ではないか。横のつながりが薄い現状では、誰が何に困っているかがわからない。そういう意味でも情報のつなぎ手がほしい。プロジェクト1のシンポジウムにはいろんな人が集まり、報告書にもいろんな人が寄稿して、そこで情報が伝わっただけでもものすごくありがたかった。「あれをやってくれたところ」ということで、サロンは情報のつなぎ手として適任である。

●このプロジェクトの意義は、内向けと外向け共にある。内向けには、いろんな人をつなぐ機能であるし、外向けにはワールドカップの正確な情報を広く一般に提供することである。「フーリガン」だけでなく「おまつりがん」がやってくることをもっと伝えたい

○プロジェクト2の具体的なイメージとしては、シンポジウムをやって報告書をつくる、及びホームページでの情報発信という2本立てか。

●集まってくる情報をただ流すだけでも価値があるかも。

○コンフェデ杯総括シンポをやった7月末に、毎年シンポジウムをやることは考えていたが、年1回でなくてもいい。ワールドカップに絡めてやってみる価値はありそう。ワールドカップ・プロジェクト2をやってみよう！

6. その他

★ワールドカップ観戦に訪れる外国人へのホームステイの提供（笹原勉）

1. とりあえず知り合いの横浜市ワールドカップ推進室の人にそういう活動をしているか聞いてみる
→ 聞いてみたところ、やっていないとのこと

2. 日本全国の開催都市他にも問い合わせる。コンフェデ杯シンポジウムの報告書を送ったサロンの名前で言えば聞きやすい → まだやっていない

3. どこでもやっていないようならプロジェクトとしてサロンで取り上げる。 ●欧州選手権でシェフィールドへ行ったとき、そこではホームステイを登録制にしていた。学生の下宿のようなどころ。市がやっているようだった

★「決勝トーナメントはない」プロジェクト（本多克巳）

● 賀川浩氏が主張していることだが、「予選リーグ」と「決勝トーナメント」という言葉は日本のメディアが作り出した造語であり、言葉を正確に用いて伝えるためのプロジェクトを立ち上げたい。ホームページ上でできるのではないか。他のページで賛同してくれるところとリンクするなどで、広げていくこともできる。2月中に！

○よそではやらないことだろう。言われたら気づくが、言われないと気づかない。大事なことである。「チーム」と「クラブ」がごちゃ混ぜに使われているのも何とかしたい。「クラブとは何か」を伝えることにもつながる

★LOVE JAPAN 近況報告（中西敦）

本番での「SANPOツアー」の準備を進めており、10月27日には鎌倉で、12月16日にさいたま市でリハーサルツアーを行った。さいたまの様子は新聞でも取り上げられた。実績としては積んできているが、「何をするのか」がまだ明確でない。課題は多い。

★"ゆたかなくらしづくり"に関して

●"ゆたかなくらしづくり"をサロンとしてどう捉えるのか、共通認識があると良い。共通の言葉があれば議論しやすい

●2002年に日本にやって来る人たちを見ていけば、何が"ゆたか"かがわかる。彼らは100年前からこんなゆたかなくらしをしているのだということが実感としてわかる

●スコットランドが来ないのが残念

○オランダも

<感想・意見（中塚義実）>

思い起こせば80年代後半、サッカーがまだマイナースポーツだった頃から「サロン2002」の原型は活動していた。Jリーグ発足、サッカーブーム、ドーハの悲劇、2002年FIFAワールドカップ開催決定、そして98年フランス大会出場…。その間、この団体は「サロン2002」となり、「会員制」の組織となった。そして2002年を迎えた。

何の母体も持たない任意団体がよくこのような形で続き、そしてよくこれだけの人材が集まったものだと感心する。この間の経緯を社会情勢の変化と絡めて考察するとおもしろい研究になるだろうと「研究者」としては思うが、むしろ「活動家」として、サロン2002の"社会実験"の行方に意識が向いている。すなわち、「当事者意識の高い構成員によるボランタリーな組織は可能か」という実験である。

月例会でも何度も出てきたが、「会員の自覚」について改めて問い直したい。

あなたは何を得ようとして ("take") サロン 2002 の会員になったのですか？

あなたはサロン 2002 に対して、また社会に対して何をささげる ("Give") ことができましたか？

現在とはともかく、長い目で見て"Give"できることは何だとお考えですか？

そして、あなた自身が「サロン 2002 である」と言うことができますか？

【サロン 2002 の"会員"】(「サロン 2002 設立宣言」(2000 年 4 月 1 日)より引用)

サロン 2002 は、前項の"志"を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン 2002 の"志"に賛同した個人であれば、誰でも、"会員"となることができる。ただし会員は、サロン 2002 からの"Take"を求めるだけでなく、サロン 2002 に対して、また社会に対して何が"Give"できるかを常に考え、"Give and Take"の姿勢でいるということが前提である。

サロン 2002 は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た"Give and Take"の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での"Give"を考えている人なら"会員"となることができる。

どんな集団であっても「2-6-2の法則(または1-8-1の法則)」が成り立つという。「集団の内部で一所懸命働いているのは、全体の2割(あるいは1割)に過ぎず、残りの6割は日和見の態度をとり、残る2割(1割)はいかなる状況のもとでもまったくやる気を見せない。これは人間の集団のみならず、集団生活する動物(働きアリなど)にも広く見られる現象のようである」(学習院大学経済学部編著『経済・経営を楽しむ35のストーリー』)。学校のホームルームがそうだし、ホームルームの代表者が集まってもこうなる。大人の世界でも大体こうなるのは、すでにご存知の通りである。サロン 2002 の会員は、それぞれの所属集団においては皆、高い問題意識を持って積極的に行動する2割の人たちだろう。だからこそ、これだけの人材が集まるネットワークはすごいと思うのだが、では集まった2割の人たちによる組織はどうか。結局は其中で「2-6-2」に陥っていないか。これは自己批判でもあり、同時に会員に対する問いかけでもある。

組織がある一つの方向にしか向かわない(ある一つの活動しかしない)とき、積極的に働きかける2割が固定化することは十分考えられる。だから、「ゆるやかなネットワーク」としての「サロン 2002」が活性化するためには、構成員が自分の力を発揮できるいろんな"場面"があることが大切である。「月例会」でも「出張」でもいい。「フットサル大会」など、汗をかくイベントでもいいし「飲み会」もOK。そして「プロジェクト」は、構成員が自分の力を発揮できる"場面"としてはまさにうってつけである。あるプロジェクトについては「日和見的な6割」だが、別のプロジェクトでは「積極的な2割」として関わる。あるいは、ちょっとした問題意識からプロジェクトを立ち上げる。こうしたことが自然発生的に起きてくるようになったとき、「当事者意識の高い構成員によるボランティアな組織」と言えるのだろう。

どんどん「言い出しっぺ」になってもらって、いろんなプロジェクトが立ち上がってくればおもしろいと思うのだがどうですか？